



第1部 上映前あいさつ(講演&シンポジウム&上映会 市民的不服従と現代 I : 「共生」 : 問われる日本 社会)

著者	呉 徳洙
雑誌名	東西南北
巻	2016
ページ	9-11
発行年	2016-03-18
URL	http://id.nii.ac.jp/1073/00003978/

第1部◎ 上映前あいさつ

呉 徳洙 映画監督

こんにちは。いま道場さんが紹介してくださったように、84年、87年と、2本のドキュメンタリー映画『指紋押捺拒否』『指紋押捺拒否2』を撮らせてもらいました¹⁾。今日はその中で、とくにパート2の方を、もともと50分あるのを15分ぐらいに縮めて皆さんに見てもらいます。もとの作品は別途DVDでお求めいただくこともできます。道場さんは「ディレクターズ・カットですね」というふうに言うんですが、ディレクターズ・カットというのは、もとの作品より長いものを言うので、短くした場合は何というのか（笑）。興味のある方は手に取っていただければと思います。



昨日、土砂降りの雨で、まさに歌謡曲じゃないけれど『氷雨』で、心配しておりました。けれども、一夜明けたらきれいなコバルトブルーで、やっぱりロバート・リケットはついてるなと思いました。しかも、3月の陽気なんだそうです。非常に嬉しくなりました。

今日のはかつての80年代の指紋押捺拒否闘争を闘ったさまざまな顔が、この会場に見えてくれて、私も久しぶりにお会いできまして、皆さんお元気そうでとても嬉しく思います。そして、その中の1人、ロバート・リケットと僕は30年前のことなんですけども、いつ、どこでこの人と出会ったのかなということを、2～3日、考えておりました。やはり指紋押捺という80年代の大きな、もちろん在日韓国・朝鮮人、台湾人、中国人が、メインでありますけれども、ヨーロッパ系やアメリカ系の人たちも含めてアゲインストしたという闘いは、戦後70年の在日の、とくに在日朝鮮・韓国人の歴史は長いですが、その中でも特筆すべき、市民運動としての不服従の闘いではないかと、改めて思います。

プロフィール——呉 徳洙（オ・ドクス）

1941年秋田県生まれ。大島渚主宰の創造社作品『白昼の通り魔』の助監督となる。70年に東映を経て、80年にOH企画を設立。在日仲間と季刊『ちゃんそり（小言）』を出版。1998年～2008年、和光大学兼任教員（『ドキュメンタリーと現代』）。代表作に『熱と光をこの子らに』（76年）、『車イスの道』（83年）、『指紋押捺拒否 パート1・2』（84年、87年）、『ナウ！ ウーマン——女が社会を変えるとき』（86年）、『まさあきの詩（うた）』（88年）、『戦後在日50年史・在日』（97年）などがある。

1) 『指紋押捺拒否』（1984年、日本語、カラー、16ミリ、50分、「指紋押捺拒否」製作委員会、呉徳洙監督）、『指紋押捺拒否2』（1987年、日本語、カラー、16ミリ、56分、「指紋押捺拒否2」製作委員会、呉徳洙監督）。

このロバート・リケットが、私に一番最初に手紙をくれたときに、なんとこのアメリカ人が私のことをですね、王様のキングで「王」様と書いてきた。私は、「チャイニーズは王さんが多いかもしれないけれども、私は、「呉」で「オ」と読むんだ」と言って彼を叱りました。

ですけど最近、——大きな話のことを朝鮮では「クンソリ」と言いますけれども——私が大状況のことを話すと、彼は「それは呉さん、ドン引きですよ」と、「ドン引き」という言葉まで使ってしまう。去年の12月に梁澄子さんたちと一緒に和光大学でちょっと打ち合わせをしたときに、梁さんを送っていったら、ロバートはそこで「この辺で、中締めをしましょうか」と。「中締め」という言葉まで知ってしまうという、そういう意味では、本当にそのうち、打ち上げのときに三三七拍子でね、何か手打ちでもやるんじゃないかというぐらい、日本の文化や言葉を知ったということで、非常に私は感慨深く思っております。

じゃあ、どうして私がこのロバートさんと知り合いになったかということですが、皆さんもあの日がちょうど自分の人生にとってターニングポイントだったという日って、あるじゃないですか。私も齢70になりますと、それは私にとっていつだったのだろうと思って。

今日は、たまたま1月16日です。私にとっての1月16日というのは、たとえば明日は、「阪神・淡路の1.17」という言い方をします。それで、4年前の3.11は、東日本大震災。たとえば朝鮮半島では、육이오（ユギオ）と言え、6.25 朝鮮戦争ですし、3.1と言え、……、まあそういうふうに、日本では、8.15とか、8.6とか、8.9と言いますが、私にとっての今日の1.16というのは、あの映画の東映で働いていたときに、13人が、会社にたてついたかどうかは知りませんが、丸ごと解雇されて、無期限ストライキに入ったのが、今日、1月16日なんです。私の12人の仲間たちが今でもたまに会うんですけども、ご存知の方もおられるかもしれませんが、その中の1人に、映画化された『釣りバカ日誌』という漫画を描いている、やまさき十三という男ですけど、これは、「じゅうぞう」は漢数字で「十三」と書く。組合員が13人だったもんですから十三。ということで1974年の1月16日に、私たちが組合の無期限ストライキに入ったというのが、私にとっての1.16です。

じゃあ、そのときそのころは何があったのか。2年前には、72年の「7.4 声明」²⁾が出されて、李恢成さんが、在日として初めて芥川賞をもらった年ですね。その74年に、それに触発されたのが、7.4 声明で大同団結としようという

2) 1972年7月4日、朴正熙韓国大統領と金日成北朝鮮首相は南北共同宣言を発し、南北の統一は武力に寄らず自主的に行われるべきこと、赤十字会談その他の南北対話を進めていくことなどを謳っていた。この声明は在日朝鮮人社会にも大きな影響を与え、民族団体間にもにわかに対話の気運が高まったが、実際には南北の国家それぞれで国家体制の強化がなされ、声明を具体化する動きはほとんど実現しなかった。

ことで出された雑誌が、あとからロバート・リケットさんも紹介すると思いますけども、『まだん』という。今は「在日韓国・朝鮮人」と言い方をしますが、当時は、「在日朝鮮・韓国人」というような言い方をしておりました。

そのころ高田馬場に住んでたものですから、そこでソウブン堂という書店に入って、平積みされてる『まだん』という、それまで見たこともないし、サブタイトルが、「在日朝鮮・韓国人」と書いてあるので、ずっと見ましたらば、奥付が、なんと真向かいに原田ビルというビルがあって、そのビルに住所がある。すぐ私は訪ねました。そしたらなんと、今は川崎の教会で長老をやっております、^ベ裴重度^{ジョンド}という男が、非常にインテリジェンスのある顔をして私を待ち受けて、私は親族以外の朝鮮人に、東京で初めて会いました。

そういったことから『まだん』は、長嶋茂雄が引退した74年の1.16に始まって、それから5年間の私の組合闘争、解雇撤回闘争の間に、裴重度さんをはじめとした『まだん』の人たち。今日、風邪で来れなかったらしいんですけども、朴容福^{ユンボク}さんとか、金幸二^{キム ヘンイ}さんとか、去年亡くなられた、私の女友達の山口文子さんとか、そういう方たちと知り合って『ちゃんそり』という雑誌を創刊しました。74年の出会いがきっかけで、79年に争議の解決金で出した雑誌でした。

それをずっと振り返ってみますと、なるほど自分の個人史を客観的に見ることはなかなかしないけれども、ずっとつながってる自分の歴史があって、それがつまり、彼はそう思っていないでしょうけども、私にとっての、いろんな世話になったロバート・リケットさんに突き当たって、今日、こうしてロバートさんが、22年間の和光大学での定年退職を迎えているわけです。彼は、お連れ合いさんの実家であります、山形の鶴岡の方に移住すると言っていますけれども、三日三月三年と言いますけれども、果たして、持つかどうかわかりませんけれども（笑）、そういうことで今日の日を迎えました。

そんなことで、私は去年の11月から今日の日を迎えるのをうきうきして待っていました。このあとには崔真碩さんとか梁澄子さんの、すばらしいシンポジウムも待ち受けてますし、その前にはロバートさんの最後の講演もあって、ぜひこれらうかがいたいと思います。

そしてまた今日これから上映する、パート2から拾った15分を、即席の編集でありますけれども、80年代の勇気がきつと短い中で伝わるといいますので、ぜひご覧になって、あとで、いろんな感想を聞かせてくれればいいと思います。どうもありがとうございました。